

第六回 『55歳からのハローライフ』と、

彼と巡礼と帯

考  
え



「ウマシカよ、  
やわらかくトンがれ！」

“UMA-SHIKA, be ton-bitious!”

弦楽器イルカ  + 友人

「やわらかくトンがれ」が「やわらかトンカツ」になるまで

弦楽器イルカ

というワケで今回からはじめた帯けど、このコピー文が完成する瞬間について説明しておきたい。

つまり青年が大志を抱くなら、中年（ウマシカである我々）はいったい何を抱くべきか。その問いからすべては始まった。野心？ はたまた、風俗嬢？ 「ウマシカよ、風俗嬢を抱け」

チガウ。強い否定の言葉に振り返ると、そこにいたのは他ならぬ俺の中のクラークさんだった。そこで俺は、強く鋭いけれども、しなやかで柔軟な中年像をイメージしてこのコピーを思いつき、俺の中のクラークさんに見せた。

俺の中のクラークさんって、実は恥ずかしながら日本語覚えたてなんだよね。だからカタカナ交じりのひらがなくらいが音読にちょうど良いらしい。なにになに？ 俺の中のクラークさんは思わず口に出してつぶやいた。立派な髭をたくわえた米国生まれの紳士だ。青年は大志をアレしよう、って熱い決意を胸に秘めてる。ただやっぱり習いたての日本語だから、まだまだ読み間違えることも多い。でもその間違いが奇跡的にうまく作用して、この帯に新しい魔法を仕掛けたんだ。

「ウ、ウマ、シカ、ヨ。ヤ、ワラ、カ、トン、カ、ツ……？」

クラークって名前のよく知らない人が、カタコトで柔らかいトンカツに関する発言をする。その瞬間、この帯は初めて完成するんだ。俺はそう思ってる。でも残念ながら関係者（俺とU）には徹底した緘口令を敷いてるから、この話はここまでだ。

わざわざ目を通してくださった皆様には、（45万部に爪楊枝で戦争を挑む程度の）戦略にご協力いただき、誠にありがとうございました。本編掲載までもう少々お時間がかかります。できましたら本編への程良い飢餓感が生み出すハングリーマーケットのほど、呆れずに辛抱強くよろしく願いいたします。